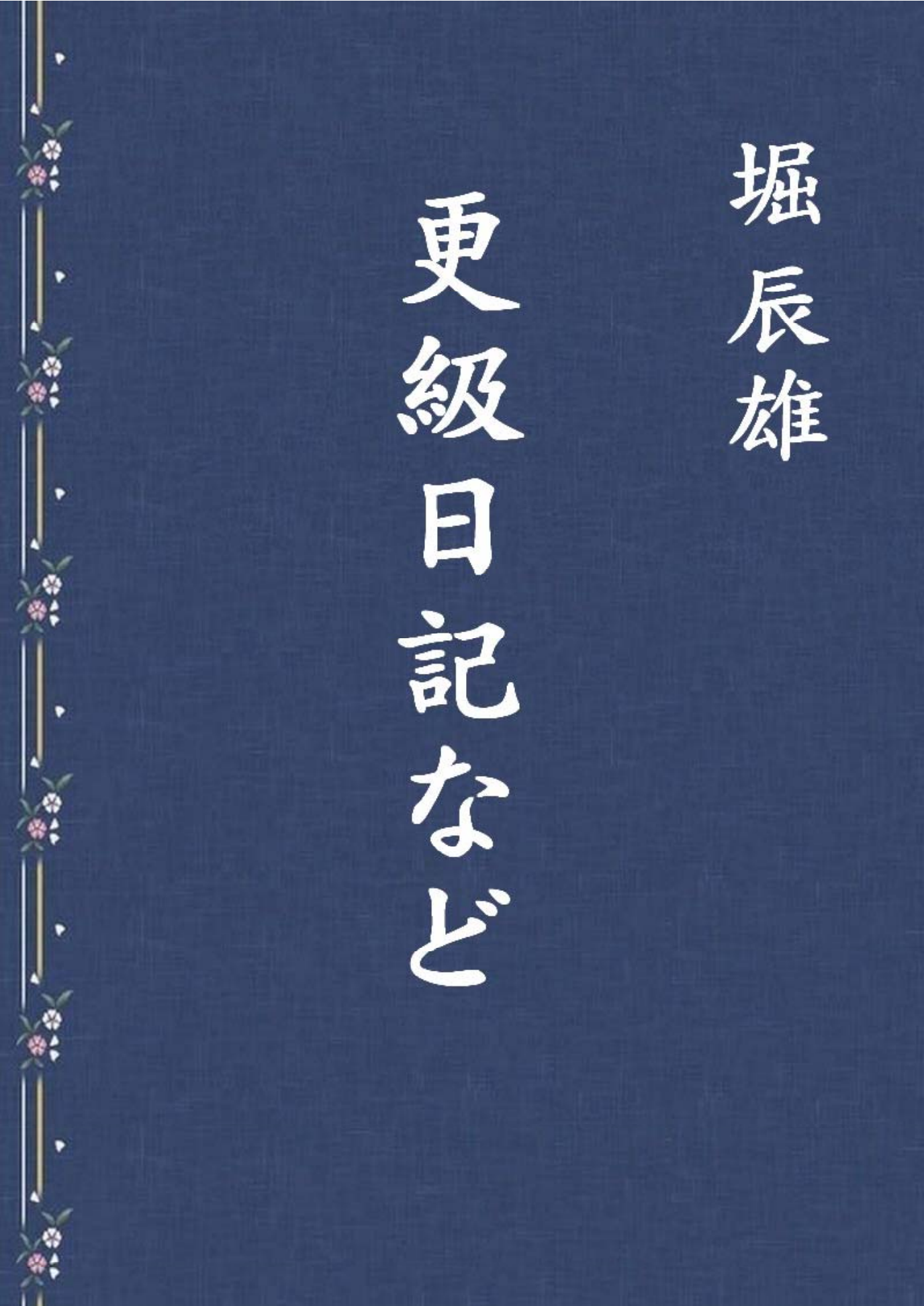


堀辰雄

更級日記など





# 更級日記など

——日本の古典に就いての若干の問に  
答えて——

御質問にお答えするほど、日本の古典をよく読んでい  
ませんのでたいへん困りましたが、

一、僅かに読んだものの中では、「更級日記」さらしななどが  
ずいぶん好きです。理由と云っても別にありませんが、  
彼女の小さな夢を彼女なりに切実に生きてらしい、この  
「更級日記」の作者などが、何となく僕には血縁のある  
ような気がするからです。

一、僕がそれから影響を受けたようなものはまだ日本

の古典の中にはありそうもありません。「源氏物語」などが楽にすらすら読めるようになったら、あるいは大いに僕など影響を受けるようになるかも知れません。しかし、生来註釈書などを読むことは大嫌いなので、いつになったら読めるようになるのだから自分にも分りませぬ。聞けば、谷崎さんが「源氏物語」の現代語訳を試みられていらっしやるとか、大いに期待しています。これは人の話などを聞いたり、その梗概ことうがいを読んだりして空想してゐるのですが「若菜」の巻のあたり、それから「宇治十帖」などは随分好きになれそうです。前半よりもずっと。そ

ここに出てくる柏木とか、薫大将とかは、光源氏なぞより僕には親しみ深いような気がされます。それから「窄き門」のアリサを彷彿せしめるような女性なども出てくるからです。そのうちにゆっくり読んで、ラジイゲが「舞踏会」をマダム・ド・ラファイエットの「クレエヴ公夫人」の影響の下に書いたように、僕も古雅な味わいのある小説を書いて見たいものです。

一、僕も一しきり歴史小説を非常に書きたいと思っただけのことがありました。その時は室町時代を背景にしたかと思っただけです。僕は以前から西洋の中世期に一種

の憧憬どうけいのようなものを持っていきますので、それに似た暗黒なる時代を、わが室町時代に求めようとしたのであります。そして僕の手本としてはクロオデルの「マリアへのお告げ」などを頭に浮べておりましたが、中世期の詩を限りなく愛していただけで、加特力教カトリックに大して関心をもたなかったように、仏教に対する素養が全然さしてつなかったもので、そんなことから僕の企ては他愛もなく蹉跌さてつしてしまいました。この頃、佐藤春夫さんの「掬水譚きくすいたん」を読んで、そういう点で大いに教えられるところがありました。僕もそのうちもう一度勉強し直して、そういう歴史小説

も手がけて見たいと思っっています。

一、いずれもそのうちしたい、したいと云うようなものばかりで、只今やり出しているようなものは一つもなく、お恥しい次第ですが、それでもときどき丸岡明君に誘われて能などを見物に行くたびごとに、急にそういうものに対する情熱などが湧いてきたりして、それを抑えつけるのに少々手こずるくらいなることもありますから、僕にもまず脈があるものとお思い下さい。

一、能といえは、僕には何度見に行っても能の見方はいつまでも極めて未熟です。大体、梅若万三郎が演<sup>や</sup>ろう



が誰がやろうがそんなことは無頓着で、ただ能の様式のもっているその雰囲気——特にそのアクセントのようなもの、そういうものをしか見ていないからです。で、むしろ、何度も見ているうちに自分も見巧者みごうしやになろうというようなことは考えずに、西洋人がはじめて能を見た場合などに感ずるにちがいない子供らしい新鮮な気持——そんな気持でいつも見ていたいのです。クロオデルが「能」について書いたエッセイなどが、そんな僕には一番鑑賞の役に立っている所以ゆえんです。

一、クロオデルと云えば、その能に関するエッセイの

一節に、「われわれの眼前にて一瞬間に構成せらるる彫像のごとく、夫が、その妻の前をふり向こうともせずに通り返ぎんとする刹那、その愛する者の肩の上に置くその腕のなかの何という優美さ、そしてわれわれの絵入新聞の中に見かけらるるごときかかる悲哀の俗な動作も、それが緩やかに注意ぶかく、行われるとき、何とそれは深い意味をもつことだろう」と書いていますが——この数行などのうちに、きわめて暗示的ではありませんが、あらゆる日本の古典の様式美といったようなものが要約せられているように思います。

一、前にも述べましたように、いくら読みたくとも「源氏物語」などは原文ではなかなか読めそうもありませんので、只今のところ敬遠している他はありませんが、能になりますと、ぼんやり見ていればそれだけでも何か解ってくるものがある、それが何か僕には貴重なものと思えますので、ときどきこれからも機会あるごとに、丸岡君に連れて行って貰うつもりです。はなはだ勝手なことばかり書いてしまいました。どうか悪あしからず。



日本文学電子図書館

---

「堀辰雄 日本の文学42」

著 者：堀 辰雄

制作者：宮澤一郎

出版社：中央公論社

昭和39年9月5日発行

---



日本文学電子図書館